

老いと病と死と

——第11三啓経『無常経』の梵文テキストと和訳——

松田和信 出本充代 上野牧生
田中裕成 吹田隆徳

1. まえがき

三啓経 (*tridaṇḍa*) は、短い阿含經典の前後をアシュヴァゴーシャ作品から取られた偈で挟みこんだ読誦文献であり、三つのセクション (*daṇḍa*, 啓) から構成されていることから三啓経と呼ばれたと思われる。チベットのポカン寺に伝えられた、40種の三啓経を含む『三啓集 (*Tridaṇḍamāla*)』の写本奥書では、『三啓集』の全体がアシュヴァゴーシャ (*Aśvaghōṣa*, 馬鳴, 2世紀) の著作とされている。ただ、アシュヴァゴーシャ作品偈が配置されるはずの第1ダングと第3ダングに阿含經典の偈や別人物の偈が使われた三啓経も認められる。従って、用いられた凡そ1500の偈のすべてをアシュヴァゴーシャ自身の偈とみなすことはできないが、そこには既存のアシュヴァゴーシャ作品に加えて、アシュヴァゴーシャの失われた『莊嚴経論 (*Sūtrālaṅkāra*)』の偈が多く含まれている可能性が高い。写本は、アティシャ (*Atiśa, Dīpaṅkaraśrījñāna*, 10-11世紀) によってインドからチベットにもたらされたもので、1930年代にポカン寺を訪れて写本を撮影したイタリアのツッチ (*Giuseppe Tucci*, 1894-1984) によって校訂本の刊行が予告されたが、果たされないまま終わっている。松田は、2018年の夏にミュンヘン大学の友人イエンス・ウヴェ・ハルトマン (*Jens-Uwe Hartmann*) を誘って、ツッチの死後忘れられていた写本の解読を開始した。それから5年経ったが、『三啓集』に対する解読研究は進み、筆者もハルトマンも、共著も含めて二人ですでに20本近い論文を書いた。さらに、それとは別に松田は日本の友人4名を誘い、40種の三啓経の中から重要と思われる三啓経を選んで定期的に研究会を持

ちながら解説を開始し、共同で二つの三啓経の梵文テキストと和訳を公表した⁽¹⁾。その第三弾として、本稿では第11三啓経を取り上げて全文を公表する⁽²⁾。

40種の三啓経の中には、対応する漢訳が存在する三啓経が3点認められる。本稿で取り上げる第11三啓経は義浄によって漢訳された『無常経』に対応する三啓経である⁽³⁾。本稿では義浄訳『無常経』の研究史には触れないが、『無常経』は同じ義浄の『南海寄帰内法伝』や敦煌写本では『三啓経』あるいは『無常三啓経』とも呼ばれ、「三啓」の意味も含めて、これまでも様々な研究者によって議論されてきた。義浄訳は梵文写本の解説に当たって大いに役立ったが、漢訳と梵文を対照させることによって、第11三啓経は40種の中で特に問題の多い三啓経であることも分かる。本稿ではできる限りそれらの点にも触れることにしたい。

2. 第11三啓経（無常経）の内容

個々の三啓経は三つのセクション（ダンダ）から構成されるが、まず、第1ダンダには、三帰依偈に続いて経典の内容と関連する複数のアシュヴァゴーシャ作品偈が配され、最後は第2ダンダの阿含経典を導入する一偈で終わる。第2ダンダには阿含経典の全文が配される。経典が終わると、第3ダンダには再び複数のアシュヴァゴーシャ作品偈が配され、最後にブツダの教えを讃える定型偈が置かれてひとつの三啓経は終わる。三帰依偈と最後の定型偈の数は三啓経毎にまちまちである。このような構成については、第11三啓経もその例外ではなく、具体的には以下の通りである。

(1) 松田和信, 出本充代, 上野牧生, 田中裕成, 吹田隆徳2022, 2023.

(2) なお、本稿と同時に松田は単独で第8三啓経（『勝義空経』）の全文を公表した（松田和信2024）。他に、第15三啓経（『十力経』）のアシュヴァゴーシャ作品偈の全文も公表している（松田和信2023）。

(3) 『無常経』以外のふたつは、第14三啓経（法天訳『解憂経』大正804）と第29三啓経（義浄訳『八無暇有暇経』大正756; ただし、完全な翻訳ではない）である。前者の一部は Hartmann, Matsuda & Szántó 2022 によって、前者に含まれるアシュヴァゴーシャ作品偈のすべては Szántó 2022 によって紹介され、後者の第2ダンダに置かれた阿含経のみ上野牧生 2020によって出版されている。

第1ダンダ

- 1 三帰依偈（8偈, 11.1.1-8）
- 2 アシュヴァゴーシャ作品偈（9偈, 11.1.9-17）
- 3 経典導入偈（1偈, 11.1.18）

第2ダンダ

無常経（*Anityatā-sūtra*）の全文

第3ダンダ

- 1 アシュヴァゴーシャ作品偈（15偈, 11.3.1-15）
- 2 ブッダの教えを讃える定型偈（3偈, 11.3.16-18）

なお、ここで「アシュヴァゴーシャ作品偈」というのは、三啓経の構造上の原理原則からそのように表記したものであって、その項に含まれる偈のすべてが何らかのアシュヴァゴーシャ作品から取られた偈であることを保証するものではない。最初に述べたように、他の三啓経ではアシュヴァゴーシャ作品以外の偈も第1ダンダと第3ダンダに置かれる例が複数認められ、事実、第11三啓経第3ダンダの第11偈（11.3.11）はクマーララータ（*Kumāralāta*）の『喩蔓論（*Kalpanāmaṇḍitikā Drṣṭāntapaṅkti*）』の偈と同じである⁽⁴⁾。なお、義浄訳『無常経』にはこの偈は含まれていない。

3. 第11三啓経（無常経）の梵文テキストと和訳

第11三啓経は、写本では第20葉の表面4行目（20r4）から第22葉の裏面2行目（22v2）にかけて書かれているが、写真の状態は万全ではない。ほとんどのフォリオに所謂ピンボケ箇所があり、不鮮明な文字には梵文テキスト内に鉤括弧を用いた⁽⁵⁾。校訂に当たっては、梵文写本に一般的に見られる書写生の書き癖や些細な誤写はすべて断りなく正規形に戻し、ダンダも自由に削除・挿入を行った。代用アヌスヴァーラもすべて修正した。なお、偈番号は写本には書かれて

(4) この偈については本稿第7節で詳細を述べる。

(5) 梵文テキストに2種の括弧を用いた。[] 写真が不鮮明な文字; « » 欄外あるいは行間に後で修正された文字。

いないが、便宜的に『三啓集』全体からの通し番号を附した。例えば、11.1.1は第11三啓経第1ダンダの第1偈を意味する。第1ダンダと第3ダンダの偈には12種の韻律が用いられている。シュローカとアールヤー調以外の韻律を一覧にすれば以下の通り。シュローカ偈はいちいち表記しないが、アールヤー調は表記し、それ以外の偈は略号で示した。

- (Apa) Aparavaktra (a/c ~~~~~ x, b/d ~~~~~ x)
 (Ind) Indravajrā (----- x)
 (Upa) Upajāti (≡----- x)
 (Māl) Mālinī (~~~~~|----- x)
 (Rath) Rathoddhatā (---|~~~~~ x)
 (Vas) Vasantatilakā (----- x)
 (Śār) Śārdūlavikrīḍita (-----|----- x)
 (Śikh) Śikhariṇī (-----|~~~~~ x)
 (Śāl) Śālinī (----|----- x)
 (Suv) Suvadānā (-----|~~~~~|----- x)

第1ダンダ

三帰依偈 (11.1.1-11.1.8)

nemur daitya ~~~~~ sahitā⁽⁶⁾ bhaktyātibhārālasaiḥ
 pādaḥ yasya śirobhir indramukūṭatviṣcumbitāgrāṅgulī |
 yaś caivaṃ na nanāma kasyacid api tyaktvāvabuddhaṃ svayaṃ
 dharmam dharmabhṛtām varaḥ sa bhagavān pāyāj jagac chaṃkaraḥ⁽⁷⁾ || 11.1.1 || (Śār)

〔仏〕〔インドラに伴われた魔 (daitya) と人 (*nara) と神々 (*amara)〕は、崇敬 (bhakti) のあまり重く垂れた (atibhārālasa) 頭もちて、インドラの王冠 (mukūṭa) の光 (tviṣ) が触れた (cumbita) 指先 (agrāṅguli) もてるその人の両足にひれ伏した。しかし、その人は、自ら覚知した法 (ダルマ=涅槃)⁽⁸⁾ 以外の誰に対してもそのようにひれ伏すことはなかった。その、法を維持する者た

(6) 写本では ddaityanarāramendrasahitā と書かれているように見える。文脈上は daityanarāmarā indrasahitā と修正して読みたいところではあるが、音節数も韻律上も許されない。現時点では解決策が不明であるため、一部を空欄のまま残し、この箇所については文脈から推定される和訳を付す。

(7) Ms. jagat saṅkaraḥ.

(8) 40種の三啓経の帰敬偈で判断する限り、三宝の法 (dharma) は、教法の意味で用いられる箇所も若干見られるが、そのほとんどは涅槃の意味で用いられている。

ちの最上者であり、幸いもたらす (śaṅkara) 世尊が世間を保護せんことを。

yo 'ni(20r5)drayākḥilavimūlitadoṣavṛkṣaḥ
kṣṣīṇopadhiviyasanadainyabhayārtijanmā |
niḥśeṣa[doṣa]paṭalodvṛtabuddhicakṣur
buddhaḥ sa me 'stu śaraṇaṃ jagade[ka]bandhuḥ || 11.1.2 || (Vas)

〔仏〕 不眠不休 (anidrā) で完全に過失の木を根絶し、取著 (upadhi) と苦難 (vyasana) と憂悩 (dainya) と恐怖 (bhaya) と不幸 (ārti) と誕生 (janman) を尽くし、過失のヴェールから完全に智慧の目を開いた、世間の人々の唯一の友である仏 (ブツダ) は私の帰依処であるべし。

jayati jagato 'rthakartā tribhagurur naikaduḥkhabhayahartā |
kartātiduṣkarāṇāṃ hitāya jagato jagadbandhuḥ || 11.1.3 || (Āryā)

〔仏〕 世間の義利 (artha) を作り、三有の人々の師であり、多くの苦と恐怖を取り除き、世間の人々の利益のために難行を行い、世間の人々の友である〔ブツダ〕は勝利する。

śaraṇaṃ vo⁽⁹⁾ 'stu sa bhagavān (20v1) kuṅaṇimatagranthimocanācāryaḥ |
mohāṇḍakośasaṃśayaghanapaṭalotpāṭanaikapāṭuḥ || 11.1.4 || (Āryā)

〔仏〕 外道 (kuṅaṇin) の見解 (mata) の束縛 (granthi) から解き放して下さる (mocana) 師 (ācārya) であり、愚痴 (moha) の殻 (aṇḍakośa) と疑惑 (saṃśaya) の厚いヴェールを取り除くことにとりわけ巧みな (ekapaṭu) かの世尊はあなた方の帰依処であるべし。

jayati bhavamūlahantā dharmāḥ kāntāradaiśikāḥ satatam |
yenāviṣṭaḥ puruṣaḥ kṛtāntam api durjayaṃ jayati || 11.1.5 || (Āryā)

〔法〕 有の根を破壊し、常に険路 (kāntāra) の案内人 (daiśika) であり、それに満たされた (āviṣṭa) 人 (puruṣa) が勝ち難い死神 (durjaya-kṛtānta) を征する〔かの〕法 (ダルマ) は勝利する。

yaḥ karuṇayā trisaṃkhyān⁽¹⁰⁾ kalpān bhavasāgare paribhramitaḥ |

(9) Ms. śaraṇaṃ sa vo.

(10) Ms. trisaṃkhyān*.

na ca khedam agāt tam ahaṃ vande buddhaṃ jagadbandhum || 11.1.6 || (Āryā)

〔仏〕 三阿僧祇劫の間、慈悲をもって〔三〕有の海 (bhavasāgara) を彷徨って
も倦むことがなかった、世間の人々の友である仏 (ブツダ) に私は帰命する。

sarvakleśo(20v2)paśamaṃ yaṃ prāpya na doṣadāham upayāti |

śītūbhāvaṃ tam ahaṃ praṇame dharmaṃ munīndragurum || 11.1.7 || (Āryā)

〔法〕 すべての煩惱の寂滅をもたらす〔法〕を得た後は、過失に焼かれること
(doṣadāha) には至らず、〔過失の〕冷滅〔に至った〕状態 (śītūbhāva) であり、
牟尼たちの最上者 (ブツダ) の師 (guru) である法 (ダルマ) に私は帰命する。

yugapat sarvasamāpattisambhavo yatra yujyate tasmai |

saṃghāya namo 'stv asakṛd guṇagaṇanidhaye viśuddhāya || 11.1.8 || (Āryā)

〔僧〕 すべての〔八〕等至 (samāpatti) の生起が同時に可能であるところ、功
徳衆 (guṇagaṇa) の宝蔵 (nidhi) である清浄なる僧 (サンガ) に繰り返し (sakṛt)
帰命すべし。

アシュヴァゴーシャ作品偈 (11.1.9–11.1.17)

rūpasya vyasanam balasya dahana<ṃ> sarvendriyāṇām vadhaḥ

śokasya prabhavo rater upaśamaś cittāśrayāṇām nidhiḥ |

jñānasya praśamaḥ (20v3) smṛteḥ paribhavo gātraśramāṇām gṛhaṃ

yā lokam pibati prabheva savitur loke na sā⁽¹¹⁾ śāmyate || 11.1.9⁽¹²⁾ || (Śār)

(11) Ms, na cā.

(12) この偈と同文が『大事 (Mahāvastu)』に含まれる。ただ、現行の刊本2種では偈としては校訂されていない。第3句の一部が欠落し、さらに Śārdūlavikrīḍita 調の長文偈であることから、両校訂者には韻文と判断できなかったのかもしれない。ただ、Edgertonはこの箇所が韻文であることに気づいていた (Cf. BHSD: 110 (āśraya), BHSR: 9.10-13, n. 40)。この偈と11.1.9との間にはヴァリエントも見られるので、参考までに、欠落部分を補って Mahāvastu の同文を偈形で示せば以下の通り (Senart ed., II, 152-153, Marciniak ed., II, 193-194)。

rūpasya vyasanam balasya mathanam sarvendriyāṇām vadhaḥ

śokānām prabhavo rativyupasamo cittāśrayāṇām nidhi |

dharmasyopaśamaḥ (smṛteḥ paribhavo) gātrāśritānām gṛhaṃ

yo lokam pibate vapuś ca grasati vyādhisyā ko nodvijet ||

注意すべき点として、11.1.9では偈の主語であるべき「古い (jarā)」が書かれておらず、Mahāvastu では「老い」ではなく「病」を主題とする偈になっているが、この偈が Mahāvastu のオリジナル偈で、それが第11三啓経に借用されたとは考え難い。恐らく順序は逆で、いずれかの時点で、当時は著名であったこのアシュヴァゴーシャ作品偈が Mahāvastu

容貌は衰え、活力は燃え尽き、あらゆる感官は傷つき、憂いが生じ、喜びは消え、心の澱み (cittāśraya) は蓄積⁽¹³⁾、知識は失われ、記憶は恥をさらし、身体 (gātra) の疲労は溜まる。太陽の光が〔止滅することがない〕ように、世間の人々を飲み干す〔古い (jarā)〕が世間において止滅することはない。

āsīd yad yauvanasthaṃ vrataniyamatapahsvādhyāyaviṣaḥam
 śītoṣṇakṣutpipāsānivarāṇakaraṇakleśeṣv⁽¹⁴⁾ anuḡaṇam |
 taj jīrṇaṃ kālayogād upahatanayanaśrotrasmṛtibalaṃ
 gātraṃ me pītasāraṃ vikalam iva mahad yānaṃ na vahati || 11.1.10 || (Suv)

若いうちは、制戒 (vrata) と禁戒 (niyama) と苦行 (tapas) と学習 (svādhyāya) に耐えることができ (viśaha)、寒さ (śīta) や暑さ (uṣṇa) や飢え (kṣudh) や渇き (pipāsā) といいた障害をなす (nivarāṇakaraṇa) 煩わしいもの (kleśa) に対応可能 (anuḡaṇa) であった私の身体 (gātra) は、時とともに老いて、視覚 (nayana) と聴覚 (śrotra) と記憶力 (smṛti) と活力 (bala) が損なわれ、壊れた大きな乗り物が〔働くことがない〕ように、精气 (sāra) を吸われて (pīta) [もはや] 働くことがない。

yeṣāṃ a(20v4)pi smṛtir atulyaḡuṇā balañ ca
 ye na dvipendrasamařeṣv api bhagnaḡpūrvāḥ |
 te 'pi smṛtiñ ca balam eva ca vikramañ ca
 sarvaṃ tyajanti vivaśā jarayābhibhūtaḥ || 11.1.11 || (Vas)

比べるもののない記憶力 (smṛti) と活力 (bala) があり、象王との戦い (samara) においてかつて敗れたことのなかった者たちも、古い (jarā) に打ち負かされ、意に反して (vivaśa) 記憶力と活力と勇ましさ (vikrama) のすべてを捨て去る。

に取り込まれたのであろう。韻律も *Mahāvastu* には希である。これと韻律を異にする同内容の偈が以下のような『ブッダチャリタ』第3章第30偈である (Johnston 1935: 24)。

rūpaśya hantrī vyasaṇaṃ balasya, śokasya yonir nidhanaṃ ratīnām |
 nāśaḥ smṛtīnām ripur indriyāṇām, eṣā jarā nāma yayaiśa bhagnaḥ || 3.30 ||

(13) cittāśrayāṇaṃ nidhiḥ は理解困難である。*Mahāvastu* を和訳した平岡聡2010: 379も既存の翻訳を参照して苦心の翻訳を行っている。Edgerton の BHS の āśraya の項では、*Mahāvastu* のこの箇所を引いて -āśravāṇāṃ と修正する可能性に触れている。本稿では、これが老いの症状の一つを表すことから、cittāśraya を Tatpuruṣa とみなして、暫定的に āśraya を「澱み」と理解しておく。

(14) Ms. -vivarāṇa-.

ikṣucchedanibhaṃ nipīḍitarasaṃ kṛtvā jarā dehinam
śuṣkaṃ kāṣṭham ivānalasya viṣaye mṛtyor mukhe muñcati |
yaṃ śrāntaṃ hṛtasāram apratibalaṃ baddhvā⁽¹⁵⁾ haraty antako
deśaṃ pū(20v5)rvam ivopasargavihatam⁽¹⁶⁾ vyāpannaśūram nṛpaḥ || 11.1.12 || (Śār)

老いは人（dehin）を、サトウキビ（甘蔗）の切れ端のように汁が搾り取られた状態にした上で、乾いた木片を火の標的（viṣaya）に〔投ずるように〕、死の入口に投ずる。疲弊して精気を奪われ、抵抗力のない〔人を〕死は縛って奪ってゆく。あたかも、英雄を失い、災難（upasarga）によって破壊されたかつての土地（deśa）を王が〔奪い返す〕ように。

nadīvapraṇ bhittvā kisalayavad utpātya ca tarūn⁽¹⁷⁾
madodvṛttān hatvā karacaranadantaiḥ pratigajān |
jarāṃ prāpyānāryaṃ taruṇajanavidveṣaṅkarīm
sa evāyaṃ nāgaḥ sahati kalabhehyaḥ paribhavam || 11.1.13⁽¹⁸⁾ || (Śikh)

川堤（nadīvapra）を破り、芽（kisalaya）〔を引き抜き〕ように樹木（taru）を引き抜き、激情した（madodvṛtta）敵対する象（pratigaja）たちを鼻と足と牙で払いのけた象でさえ、若者たち（taruṇajana）に嫌悪を抱かせる（vidveṣakarī）卑賤な（anārya）老いを得た後は、若い象（kalabha）たちの軽蔑を耐え忍ぶことになる。

muhyantaṃ dahyamānaṃ bahuvidharujaṃ klāntendriyajaḍam⁽¹⁹⁾
srastāṅgaṃ nisvanantaṃ prahatam a(21r1)[nimiṣam] duḥkhārtam avāṣam |
[śayyāsthaṃ naṣṭakāryaṃ paṭa iva likhitaṃ]⁽²⁰⁾ «yaṃ» paśyati janaḥ
svam duḥkhaṃ so 'pi bhunkte na guruṣu na suteṣv ārtim⁽²¹⁾ vibhajati || 11.1.14 || (Suv)

(15) Ms. baddhā.

(16) Ms. ivopasargavisahatam.

(17) Ms. tarun.

(18) Vallabhadeva; *Subhāṣitāvalī*, ed. by P. Peterson, Bombay 1886 (*Bombay Sanskrit Series*, 31)
nadīvapraṇ bhittvā kisalayavad utpātya ca tarūn
madonmattān jītvā karacaranadantaiḥ pratigajān |
jarāṃ prāpyānāryaṃ taruṇajanavidveṣajananiṃ
sa evāyaṃ nāgaḥ sahati kalabhehyaḥ paribhavam || 631 ||

(19) Ms. -jaham.

(20) 後半部は paṭa iva likhitaṃ と書かれているように見えるが、確信を持ってない。和訳は暫定的にこの読みに従う。

(21) Ms. arttim.

意識が薄れ (muhyat)、発熱し (dahyamāna)、様々な疾患があり (bahuvividharuj)、疲弊した感官ゆえに遅鈍 (jaḍa) で、四肢が弛緩し (sraścāᅅga)、荒い息をして (nisvanat)、打ちのめされ、瞬きせず、苦痛に苛まれ (duᅅkhārtā)、思うようにならず (avaśā)、寝台に横たわり (śayyāstha)、所作を失い (naścakārya)、画布に描かれたような (?) 者を人は見るが、〔見られている〕その者も自分の苦しみを享受しているのであって、師や子供たちに病苦 (ārti) を分け与えることはない。

vyādhim̄ haranti pitaro yadi nātmajanām
 vyādhau bhavanti yadi vā na sutāᅅ samāᅅśāᅅ |
 ātmā svam eva yadi vetti narasya duᅅkham
 ātmaiva kasya pi«ta»ro, bhuvi kasya putrāᅅ || 11.1.15 || (Vas)

もし親が〔アートマンから生まれた〕子 (ātmaja) の病を取り除かないなら、もし子が〔親の〕病気の時に〔その病気を〕等分して受け取らないなら、もし人に〔宿る〕アートマンが〔親や子の苦しみではなく〕自分の苦しみだけを感じるなら、この世 (bhū) で、アートマン自体は誰の親であり、誰の子であろうか。

icchanti hartuᅅ maraᅅam̄ (21r2) rujam̄ vā⁽²²⁾
 sutāᅅ pitᅅᅅnām̄ pitaraś ca teśām |
 nāpy e[śa] --⁽²³⁾ 'sya parasparasya
 svaiᅅ karmabhir̄ gacchati jīvalokaᅅ || 11.1.16 || (Ind)

子たちは親の死や病苦 (ruj) を取り除くことを願い、親は彼ら (子たち) の〔死や病苦を取り除くことを願う〕。この双方 (paraspara) にその…がなくても、世間の人々 (jīvaloka) は自らの業とともに〔この世から〕去って行く。

āyuh̄ śarajjaladharapratimaᅅ ramaᅅyam̄
 sampattayaᅅ kusumitadrumasāratulyāᅅ |
 svapnopabhogacapalā viᅅayopabhogaᅅ
 saᅅkalpamātraramaᅅyam̄ idaᅅ hi sarvam || 11.1.17 || (Vas)

命は秋雲 (śarajjaladhara) のように〔はかなくて〕愛らしい。繁栄 (sampatti) は花咲いた〔芭蕉の〕木の芯に等しい。対境 (viᅅaya) の享受 (upabhoga) は

(22) Ms, rujām=vā

(23) 写真の状態が悪く、2文字分が読み取れない。韻律記号のみ入れて空欄としておく。

夢の中での享受〔のように〕移ろいゆく。実にこの一切はただ妄分別 (saṃkalpa) によって楽しまれるものにすぎぬ。

經典導入偈 (11.1.18)

idam aparam udīrṇakleśagha(21r3)rmāpahāraṃ
[mada]śamakaraśī[ta]ṃ [tṛḍva]tām ambuvarṣam ॥
pivata sugatasūtrāvarjītāḥ śrotrapātrair
daśabaladharameghaiḥ saṃprasādyeha cittam ॥ iti ॥ 11.1.18⁽²⁴⁾ ॥ (Māl)

善逝の經典に魅せられた者たちは、ここで〔自分の〕心を清らかにして、渴愛持てる者 (tṛḍvat) たちに増大した煩惱の熱を取り除き、酔い (mada) を鎮める、十力持てる雲 (ブツダ) たちによって〔雨降らされた〕このもう一つの冷たい雨水を、耳という器をもって飲め。

第2ダンダ (Anityatā-sūtra)

§1 evaṃ mayā śrutam ekasmin samaye bhagavān śrāvastyāṃ viharati sma jetavane
'nāthapiṇḍadasyārāme ॥ tatra bhagavān bhikṣūn āmantrayate sma ॥

このように私は聞いた。あるとき世尊はシュラーヴァステイー (舎衛城) のジェータ (祇陀太子) の林、アナータピンダダ (給孤独長者) の園 (祇園精舎) に留まっていた。そこで世尊は比丘たちに言った。

§2 traya ime bhikṣa(21r4)vo dharmā aniṣṭā akāntā apriyā amanaāpā lokasya ॥ katame
trayaḥ ॥ yad uta vyādhir jarā maraṇāṅ ca ॥ ime hi bhikṣavas trayo dharmā aniṣṭā
akāntā apriyā amanaāpā loke na syur yad uta vyādhir jarā maraṇāṅ ca na tathāgatā
arhantaḥ samyaksambuddhā loka utpadyeran ॥ na ca punas tathāgatapra(21r5)veditasya
dharmavinayasya loke deśanā prajñāpitā ॥

「比丘たちよ、世間の人々に求められず、愛されず、好まれず、喜ばれない三つの事柄 (法) がある。三つとは何か。即ち、病と老いと死である。実に、比丘たちよ、世間の人々に求められず、愛されず、好まれず、喜ばれない三つの事柄 (法)、即ち、病と老いと死がないならば、如来にして阿羅漢にして正等覺者であるお方たちは世間に現れなかったであろう。さらに、如来によって証得された法 (dharma) と律 (vinaya) の説示も世間において実行されなかった〔であろう〕。」

(24) 第40三啓経の經典導入偈もこれと同じである (Ms. 112v5-113r1)。

§3 yasmāt tarhi bhikṣavas traya ime dharmā anīṣṭā akāntā apriyā amanaāpā lokasya yad uta vyādhir jarā maraṇañ ca tasmāt tathāgatā arhantaḥ samyaksambuddhā loke utpadyante | tasmāc ca tathāgatapaveditasya dharmavinayasya loke deśanā pra(21v1) jñāyate ||

「実に、比丘たちよ、世間の人々に求められず、愛されず、好まれず、喜ばれない三つの事柄、即ち、病と老いと死があるから、如来にして阿羅漢にして正等覚者であるお方たちが世間に現れ、如来によって証得された法と律の説示が世間において実行されるのである。」

§4 idam avocad bhagavān idam uktvā sugato hy athāparam etad uvāca śāstā |

世尊はこのことを説いた。これを説き終わって、善逝にして師であるお方はさらに次のことを説いた⁽²⁵⁾。

jīryanti vai rājarathāḥ sucitrā
atho śarīram api⁽²⁶⁾ jarām upaiti |
satām tu dharmo na jarām upaiti
santo hy enaṃ⁽²⁷⁾ satsu⁽²⁸⁾ pavedayante || 11.2.1 || =Uv 1.28

色とりどりの王の車も朽ちてゆく。また、身体も老いに至る。しかし正しい人々のダルマ（法）は老いには至らない。正しい人々はその〔ダルマ〕を正しい人々に知らせる。

dhik tvām astu jare grāmye, virūpakaraṇī hy asi |
tāvan manoramaṃ bimbaṃ yāvāt tvayā na mṛdyate⁽²⁹⁾ || 11.2.2 || =Uv 1.29

ああ、卑劣な老いよ、お前という奴は！お前は〔身体を〕醜くする。お前によって潰されない限り、人の姿（bimba）は魅力的（manorama）なのに。

yo 'pi varṣaśataṃ jīve(21v2)t so 'pi mṛtyuparāyaṇaḥ |
anvetyainaṃ jarā hanti vyādhir vā yadi vāntakaḥ || 11.2.3 || =Uv 1.30

(25) 以下の3偈は Uv 1.28-30 と同一偈であり、最初の偈の平行が *Dhammapada* 151 である。

(26) 韻律 (Triṣṭubh) の都合上、śarīram api の -ram a- をひとつの長音節として読む。Cf. *Dhammapada* 151: sarīraṃ pi.

(27) Triṣṭubh の第3音節は通常は単音節であるが、第4音節の後に caesura がある場合は長音節も可能。Cf. Balk 2011: § 35.

(28) satsu の u の箇所は韻律上単音節が要請されるため、次の pra- を pa-と見なす。Cf. *Dhammapada* 151: pavedayanti, Uv 1.28 では nivedayante である。

(29) Uv 1.30d: jarayā hy abhimarditam.

百年を生きたとしても〔結局〕死に終わる。老い、あるいは病、あるいは死神 (antaka) がつきまとってその人を殺すのだ。

§5 idam avocad bhagavān uktaṃ caitad bhagavatoktam arhatā | catvāra ime bhikṣavo dharmā iṣṭāḥ kāntāḥ priyā manaāpā lokasya | te ca sarve anīṣṭaparyavasānāḥ | katame catvāraḥ | (1a) ārogyaṃ bhikṣava iṣṭaṃ kāntaṃ priyaṃ manaāpaṃ lokasya | sarvaṃ (21v3) cārogyaṃ vyādhiparyavasānam | (1b) vyādhir anīṣṭo 'kānto 'priyo 'manaāpo lokasya | (2a) yauvanam iṣṭaṃ kāntaṃ priyaṃ manaāpaṃ lokasya | sarvañ ca yauvanam jarāparyavasānam | (2b) jarā anīṣṭā akāntā apriyā«'»manaāpā lokasya | (3a) jīvitam iṣṭaṃ kāntaṃ priyaṃ manaāpaṃ lokasya | sarvañ ca jīvitam maraṇaparyavasānam | (3b) maraṇa(21v4)m anīṣṭam akāntam apriyam amanaāpaṃ lokasya | (4a) sampattir iṣṭā kāntā priyā manaāpā lokasya | sarvā ca sampattir vipattiparyavasānā | (4b) vipattir anīṣṭā akāntā apriyā«'»manaāpā lokasya ||

世尊はこのことを説いた。また世尊は次のことを説いた。阿羅漢であるお方は〔次のことを〕説いた。「比丘たちよ、世間の人々に求められ、愛され、好まれ、喜ばれる四つの事柄（法）がある。それら〔四つ〕はすべて求められないものに終わる時が来る。四つとは何か。(1a) 比丘たちよ、健康 (ārogya) は世間の人々に求められ、愛され、好まれ、喜ばれるものである。しかしすべての健康は病に終わる時が来る。(1b) 病は世間の人々に求められず、愛されず、好まれず、喜ばれないものである。(2a) 比丘たちよ、若さ (yauvana) は世間の人々に求められ、愛され、好まれ、喜ばれるものである。しかしすべての若さは老いに終わる時が来る。(2b) 老いは世間の人々に求められず、愛されず、好まれず、喜ばれないものである。(3a) 比丘たちよ、命 (jīvita) は世間の人々に求められ、愛され、好まれ、喜ばれるものである。しかしすべての命は死に終わる時が来る。(3b) 死は世間の人々に求められず、愛されず、好まれず、喜ばれないものである。(4a) 比丘たちよ、幸福 (sampatti) は世間の人々に求められ、愛され、好まれ、喜ばれるものである。しかしすべての幸福は不幸に終わる時が来る。(4b) 不幸は世間の人々に求められず、愛されず、好まれず、喜ばれないものである。」

§6 idam avocad bhagavān idam uktvā sugato hy athāparam etad uvāca śāstā |

世尊はこのことを説いた。これを説き終わって、善逝にして師であるお方はさらに次のことを説いた。

anityam ārogyam anitya yauvanam
 sampa(21v5)ttayo jīvitam apy anityam |
 anityatāyābhihatasya jantoḥ
 katham ratiḥ kāmagaṇeṣu jāyate || 11.2.4 ||⁽³⁰⁾

健康 (ārogya) は虚しい。若さ (yauvana) は虚しい。成功 (saṃpatti) も命 (jīvita) も虚しい。無常の力 (anityatā) に打ち負かされた生類に、どのようにして愛欲の対象 (kāmaguṇa) に対して喜びが生じようか。

idam avocad bhagavān āttamanasas te ca bhikṣavo bhagavato bhāṣitam abhyanandan ||
 世尊がこのことを説くと、満足した彼ら比丘たちは世尊の説かれたことに歓喜した。

第3ダンダ⁽³¹⁾

アシュヴァゴーシャ作品偈 (11.3.1-15)

kurvan viṣayakārpaṇyād⁽³²⁾ akāryam amaro yathā |
 kiṃ jīvitamadonmatto bhayaṃ paśyasi nāgrataḥ || 11.3.1 ||

対境 (viṣaya) に飢えるあまり、してはならないこと (akārya, 悪事) をなしているあなたは、まるで不死 (amara) であるかのように命の驕り (jīvitamada) に酔い、なぜ目前にある〔死の〕危難を見ないのか。

marmasu cchidyamāneṣu mucyamā(22r1)neṣu saṃdhiṣu |

yad duḥkhaṃ mriyamāṇasya hṛdi tat [kartu]m ar[hasi] || 11.3.2 || =Śivagītā 8.56⁽³³⁾

(30) 韻律 (Triṣṭubh-Jagatī) の都合上、第1パーダの anitya (中性主格) と第3パーダの anityatāyā (女性具格) に中期インド語の要素が残存している。この事実からすると、パーリ語聖典や漢訳阿含にこの偈のパラレル偈がありそうなものであるが、現時点では見出せていない。なお、本稿第5節末で紹介するチベット語訳経典では、この偈は次のように翻訳されている。nad med mi rtag lañ tsho rtag ma yin || 'byor pa mi rtag srog kyañ rtag ma yin || skye bo mi rtag ñid kyis ñen gyur na || 'dod pa'i yon tan dga' ba ji ltar skye ||

(31) 末尾の定型偈を除いて、第3ダンダには15偈が置かれるが、そのうち7偈はヒンドゥー教聖典のひとつとされる Śivagītā 第8章に組み込まれている。これは、アシュヴァゴーシャ作品偈がオリジナルで、Śivagītā がそれを利用した可能性が高いのではないか。古代インドでは、アシュヴァゴーシャ作と言われる偈が仏教の内外を問わず、いかに広く知られていたかを物語る証拠のひとつとなるように思われる。Śivagītā と同じ偈のうち、1929年の刊本と比べてヴァリエーションの認められる偈は注記する。なお、Śivagītā の第8章には第14三啓経 (Śokavinodana) 第1ダンダの二つの偈 (14.3.20 & 21) も含まれる。

(32) Cf. Saundarananda 11.27c, viṣayakārpaṇyād.

(33) marmasūnmathyamāneṣu mucyamāneṣu saṃdhiṣu | yad duḥkhaṃ mriyamāṇasya smaryatām

〔身体の〕急所 (marman) が断たれてゆく時、〔肢節の〕結合 (saṃdhi) が解かれてゆく時、死にかけている人が受ける苦しみをあなたは心に刻むがよい。

dr̥ṣṭyām ākṣipyamāṅyāṃ saṃjñāyā hriyamāṅayā⁽³⁴⁾ |
mṛtyuśalyena viddhasya trātā khalu na vidyate || 11.3.3 || =Śivagītā 8.57⁽³⁵⁾

失われてゆく意識 (saṃjñā) によって眼球 (dr̥ṣṭi) が上転してゆく時、死の矢 (mṛtyuśalya) に貫かれた人に助けてくれる人 (trātr) は決して存在しない。

saṃru[dhya]mānas tamasā mahac chvabhram ivāviśan |
tyakṣyasi⁽³⁶⁾ svajanaṃ nighnaḥ kālapāśena yoktritaḥ || 11.3.4 || =Śivagītā 8.58⁽³⁷⁾

闇 (tamas) に閉じ込められ、あたかも大きな穴 (śvabhra) に入ってゆく人のように、死の鎖 (kālapāśa) に繋がれたあなたは、〔死の〕なすがままに (nighna)、親族 (svajana) を棄てるであろう。

hikkayā bādhyamānasya śvāsena pariśuṣyataḥ |
kr̥(22r2)[ṣyamānasya] ... na na khalv asti parāyaṇam || 11.3.5⁽³⁸⁾ || =Śivagītā 8.60⁽³⁹⁾

しゃっくり (hikkā) に苦しめられ、荒息 (śvāsa) に〔喉が〕干からび、死神に引き寄せられている人に⁽⁴⁰⁾、避難先 (parāyaṇa) は決して存在しない。

tan mumukṣubhiḥ || 8.56 ||

(34) 写本は hriyamāṅyāṃ であるが、後で nā の長母音記号と最後のアスヌヴァーラは消されているように見える。Śivagītā 8.57 は韻律的に正しいテキストを伝えている (次注を参照)。

(35) dr̥ṣṭāv ākṣipyamāṅyāṃ saṃjñāyā hriyamāṅayā | mṛtyupāśena baddhasya trātā naivopalabhyate || 8.57 ||

(36) Ms. tyakṣasi.

(37) saṃrudhyamānas tamasā mahac cittam ivāviśan | upāhūtas tadā jñātīn īkṣate dīmacakṣuṣā || 8.58 ||

(38) 11.3.4と11.3.5の2偈は義浄訳 (後述) では順序は逆であるが、この2偈は恐らくセットであり、これを1偈で表現したのが22.1.17である。松田和信2022: 26参照。

yadā viśaṃjñāḥ sthiraṇīscalekṣaṇaḥ, prasaktahikkāḥ śvasanārtaceṣṭitaḥ |

tamo mahac chvabhram ivopañiyate, tadā kva dārāḥ kva sutāḥ kva bāndhavāḥ || 22.1.17 ||

大穴の如き闇に導かれるように、意識を失い、硬く不動の目になり、しゃっくりが止まらず、荒息に苦しみがく時、その時、妻はどこに、子供はどこに、親族はどこに。

(39) hikkayā bādhyamānasya śvāsena pariśuṣyataḥ | mṛtyunā kṣyamānasya na khalv asti parāyaṇam || 8.60 ||

(40) 語順は違うものの、Śivagītā 8.60 から判断して、「死神によって」に相当する語が三音節の具格 (vipulā の可能性もあるので音節の長短はいずれも可) で書かれているものと思われる。しかし、写本写真のこの箇所は不鮮明で、韻律に合う適当な語が見つからない。なお、字形からは kālena には見えない。

samsāracakram āruḍho⁽⁴¹⁾ yamadūtair adhiṣṭhitaḥ |
kva yāsyāmīti duḥkhārtaḥ śaraṇaṃ nādhigacchati || 11.3.6 || =Śivagītā 8.61⁽⁴²⁾

輪廻の輪に乗った人は、閻魔の使者 (yamadūta) たちに率いられ、「私はどこに行くのだろうか」と苦痛に苛まれ (duḥkhārta)、避難処 (śaraṇa) を得ることはない。

nāsti prajñāsamaṃ cakṣur nāsti mohasamaṃ tamaḥ |
nāsti vyādhisamaḥ śatruṃ nāsti mṛtyusamaṃ bhayaṃ || 11.3.7 || =Gāthāsataka 95⁽⁴³⁾

智慧 (prajñā) に匹敵する目 (cakṣus) は存在しない。痴 (moha) に匹敵する闇 (tamaḥ) は存在しない。病 (vyādhi) に匹敵する敵 (śatru) は存在しない。死 (mṛtyu) に匹敵する恐怖 (bhaya) は存在しない。

tasmād avaśyaṃ prāptavye mṛtyau paramadāruṇe |
kāmebhyaḥ (22r3) saṃhāra manaḥ saddharme ca ratiṃ kuru || 11.3.8 ||
=Gāthāsataka 96⁽⁴⁴⁾

それ故、極めて恐ろしい死が必ずやって来るのだから、愛欲の対象 (kāma) から心を遠ざけよ。正しい教え (saddharma, 正法) に対する喜びを見出せ。

nainaṃ suhṛt samu[pa]yā[ti] na bandhuvargo
[nārthās ca] yatnaracitā na ratir na bhogās |
tasmin kṣaṇe priyaśātāni ca varjayitvā
prāṇāḥ svakarmaphalapatyadanāḥ prayānti || 11.3.9 || (Vas)

友人 (suhṛd) はその人について行くことはない。縁者たち (bandhuvarga) も、苦勞して築いた財産 (artha) も、快樂 (rati) も、享受物 (bhoga) も [ついて

(41) Ms. āruḥ | dho.

(42) samsārayantram āruḍho yamadūtair adhiṣṭhitaḥ | kva yāsyāmīti duḥkhārtaḥ kālapāśena yojitaḥ || 8.61 ||

(43) この偈と次の偈はヴァラルチ (Vararuci) の *Gāthāsataka* 第95偈と第96偈と同一偈である (Hahn 2012: 440)。この発見は松田の共同研究者のイェンス＝ウヴェ・ハルトマンによる。さらに、この2偈は龍樹に帰せられる *Prajñādaṇḍa* 第104偈と第105偈でもある (Campbell 1919: 55-56; Hahn 2009: 68-69)。前者の和訳は岡田行弘1995: 13参照。また、松田和信2022: 26の時点では気付いていなかったが、注38に引用した22.1.17は *Prajñādaṇḍa* 第121偈と同一である (Hahn 2010: 8)。より多くの例を集める必要はあるが、これらの偈も、当時のインドでアシュヴァゴーシャ作として流布していたものが、*Prajñādaṇḍa* や *Gāthāsataka* のような教訓詩集に取り入れられた可能性が高いように思われる。

(44) 前注参照。

行くことはない。その〔死の〕瞬間に、愛する人百人を捨てて、人 (prāṇa) は自らの業果という旅の糧食 (pathy-adana) 〔だけ〕を持って去って行く。

arthasya yatnādhigatasya loke
nimīlitaś caiva paraḥ prabhuś ca |
ekaṃ tu karmaiva parair ahāryaṃ
chāyeva (22r4)[gacchanta]m anu[prayā]ti || 11.3.10 || (Upa)

この世 (loka) で苦勞して手に入れた財産 (artha) は、〔元の持ち主が〕瞑目してしまうと (nimīlita)、他人が〔持ち〕主 (prabhu) になる。しかし、唯一、業だけは他人に奪われることなく、影 (chāyā) の如く〔来世に〕去って行く人につき従って行く。

nivartante yodhāḥ svabhavanam atho yānti sacivāḥ
samūho yaḥ strīṇāṃ padam api hi nānurvrajati saḥ |
puraṃ paurāś caiva dvipahayarathadravyanicayaiḥ
samaṃ tiṣṭhanty eva svakṛtam anuyāty eva tu naram || 11.3.11 || (Śikh)

〔王が死ぬと〕兵士 (yodha) たちは〔戦場から〕退却し、また大臣 (saciva) たちは自分の家に帰る。〔後宮の〕女性の群れも〔王の〕跡 (pada) につき従うことはない。城 (pura) や城の人々 (paura) も、象 (dvipa) や馬 (haya) や車 (ratha) や財 (dravya) の集積と一緒に〔この世に〕留まるが、〔王〕自身によって作られた (svakṛta) 〔業だけ〕が〔王であった〕人に必ずつき従って行く⁽⁴⁵⁾。

mātā pitā gurujanah svajano mameti
māyopame jagati kasya bha(22r5)vet pratijñā |
eko yadā⁽⁴⁶⁾ vrajati karmapuraśaro⁽⁴⁷⁾ ,yam
viśrāmavṛkṣasadṛśaḥ khalu jīvalokaḥ || 11.3.12⁽⁴⁸⁾ || (Vas) =Śivagītā 8.67

(45) この偈はクマララータの『喩蔓論』に現れる偈と同じであるが、詳細については本稿第7節で解説する。

(46) Śivagītā 8.67c では eko yadā が eko yato に変わっている。

(47) Ms. -purāśaro.

(48) イエンス=ウヴェ・ハルトマンからこの偈がヴェーダーンタ文献の *Brahmavallī* 2.219 と同じであることを教えられたが、恐らく *Śivagītā* からの転用であろう。*Brahmavallī* では、第1句の gurujanah の代わりに gurusutāḥ と読む。

人が業を先導者として一人で進んで行く時、幻術の如き世間では、「私には母がいる、父がいる、師がいる、親類がいる。」と誰が断言できようか。実に生者の世間 (jīvaloka) は〔一時的な〕休息の木に似ている。

sāyaṃ sāyaṃ vāsavṛkṣe sametāḥ
prātaḥ prātas tena tenopayānti |
tyaktvānyonyam taṃ ca vṛkṣam vihaṅgā
yadvat tadvad bāndhavā bāndhavāṃś ca || 11.3.13⁽⁴⁹⁾ || (Śāl) = Śivagītā 8.68⁽⁵⁰⁾

鳥 (vihaṅga) たちが毎晩ねぐらの木 (vāsavṛkṣa) に集まり、毎朝お互いとそ
の木〔両方を〕を捨てて、それぞれ〔の方角〕に向かって〔飛んで〕行くよ
うに、同様に親族 (bāndhava) たちは親族たちを〔捨てて去って行く。〕

jīvitam jalataraṅgacañcalam
saṃpado [bahu]vipattipha[ladā]ḥ |
(22v1)bhaṅgurāḥ priyajanena saṃgamāḥ
sādarāḥ kuruta puṇyasamcayam || 11.3.14 || (Rath)

命は水〔面〕の波のように揺れ動き、繁栄は多くの不幸という果を与え、愛し
い人との交わりは束の間のものに〔すぎぬ。だから〕あなた方は注意深く福德
の集積を作れ。

paśur iva vahanāya⁽⁵¹⁾ yoktrito
jhaṣa iva vāriṇi jālasamvṛtaḥ |
mṛgakulam iva vāgurāvṛtaṃ
jagad avaśam maraṇāya tiṣṭhati || 11.3.15⁽⁵²⁾ || (Apa)

運搬用に軛をつけられた家畜 (paśu) のように、水中で網にかかった魚 (jhaṣa)
のように、罾にかかった獣たち (mṛgakula) のように、世間は否応なく死に瀕
している。

(49) この偈については松田和信2022: 29-31で紹介済み。その後の発見として、同じ偈が Śivagītā 8.68にも見られる。

(50) sāyaṃ sāyaṃ vāsavṛkṣam sametāḥ, prātaḥ prātas tena tena prayānti | tyaktvānyonyam taṃ ca vṛkṣam vihaṅgā, yadvat tadvaj jñātayo jñātayaś ca || 8.68 ||

(51) Ms. havanāya.

(52) 同じ偈は第9と第38三啓経にも現れるが、それについては松田和信2022: 31-32で紹介済み。

ブツダの教えを讃える定型偈 (11.3.16-11.3.18)

buddhena bodhiṃ paramām avāpya
ye sthāpitāḥ sūtramayāḥ pradīpāḥ |
te nityam ajñānatamāṃsi bhittvā
lokeṣu niṣkampaśikhā jvalantu || 11.3.16 || (Ind)

最高のさとりを得たブツダによって安置された經典製 (sūtramaya) の灯火 (pradīpa) が、常に無知の闇 (ajñānatamas) を破り、世間の人々の間で揺るぎない炎もちて燃え続けんことを。

jvalatu ciraṃ (22v2) dharmolketi yāvat⁽⁵³⁾ || 11.3.17 ||
法 (ダルマ) の松明 (ulkā) が長く、云々。

jvalatu ciraṃ dharmolkā yā ciraparinirvṛte 'pi lokagurau |
ajñānatimiramathanī samaviṣamaṃ saṃprakāśayati || (Āryā)
世間の師 (ブツダ) が般涅槃して久しくとも、無知の闇 (ajñānatimira) を破り、平路 (sama) と悪路 (viṣama) を照らす法 (ダルマ) の松明 (ulkā) が長く燃え続けんことを。

ye 'bhyāgatā iha surāsuranāgayakṣa-
gandharvakinnaranarāḥ śravaṇāya dharmam |
rakṣantu te jagad idaṃ jinaśāsanañ ca
dharmam munīndrakathitaṃ ca carantu nityam || 11 || 11.3.18 || (Vas)

法 (ダルマ) を聴くためにここにやって来た神々やアスラやナーガやyakṣaやガンダルヴァやキンナラやナラたちは、この世間と勝利者の教え (jinaśāsana) を守るべし。牟尼の王によって説かれた法 (ダルマ) を常に行ずべし。

4. 義浄訳『無常 (三啓) 経』

本稿で提示した第11三啓経に対応する漢訳が義浄訳の『無常経』である (大正 No. 801, 15卷745b-747a)。これには『無常三啓経』と題される同文の敦煌写本が複数存在し、首部を欠くが、その中の1本 (Stein 153) が大正蔵経の85卷「古

(53) ここでは偈の冒頭部だけ示して後は省略されているが、全文は他の三啓経から読むことができる。省略部分を第40三啓経から補って全文和訳する (Ms. 115r3)。

逸部・疑似部」に収められている (No. 2912, 1458a-1459a)⁽⁵⁴⁾。敦煌写本の末尾では、經典前後の偈が馬鳴の作であり、偈→經典→偈という三部構成であるから「三啓」と呼ばれることが注記されている。研究者には周知のことであろうが、同様の説明は同じ義浄の『南海寄帰内法伝』にも記されている⁽⁵⁵⁾。第11三啓経の梵文テキストの分節に従い、漢訳の偈形式にこだわらずに偈番号を付け、さらに対応する第11三啓経の偈番号および他文献に現れる同一偈番号も付加して義浄訳を示せば次の通りである。第2ダンダの經典部分には梵文のパラグラフ番号も入れておく。なお、大正蔵経に収められた義浄訳では、『無常経』の終わった後に臨終儀礼に関わる長文(大正蔵2段分)が付加されているが、恐らく後の時代に中国内で書かれたものであろう。ここでは取り上げない。

第1ダンダ

三帰依偈

稽首歸依無上士	常起弘誓大悲心	爲濟有情生死流	令得涅槃安隱處
大捨防非忍無倦	一心方便正慧力	自利他悉圓滿	故號調御天人師 (1)
稽首歸依妙法藏	三四二五理圓明	七八能開四諦門	修者咸到無爲岸
法雲法雨潤群生	能除熱惱燬衆病	難化之徒使調順	隨機引導非強力 (2)
稽首歸依眞聖衆	八輩上人能離染	金剛智杵破邪山	永斷無始相纏縛
始從鹿苑至雙林	隨佛一代弘眞教	各稱本縁行化已	灰身滅智寂無生 (3)
稽首總敬三寶尊	是謂正因能普濟	生死迷愚鎖沈溺	咸令出離至菩提 (4)

アシュヴァゴーシャ作品偈

生者皆歸死	容顏盡變衰	強力病所侵	無能免斯者 (5)
假使妙高山	劫盡皆壞散	大海深無底	亦復皆枯竭 (6)
大地及日月	時至皆歸盡	未曾有一事	不被無常吞 (7)
上至非想處	下至轉輪王	七寶鎖隨身	千子常圍遶 (8)
如其壽命盡	須臾不暫停	還漂死海中	隨縁受衆苦 (9)

(54) 敦煌写本の書誌情報は菅原泰典2000: 337f.に詳しい。

(55) 大正54卷, 227a13-17「所誦之經、多誦三啓。乃是尊者馬鳴之所集置。初可十頌許。取經意而讀歎三尊。次述正經。是佛親説。讀誦既了。更陳十餘頌。論迴向發願。節段三開故云三啓。」和訳は宮林昭彦・加藤栄司2004: 324-326参照。

循環三界内 猶如汲井輪 亦如蠶作繭 吐絲還自纏 (10)

無上諸世尊 獨覺聲聞衆 尚捨無常身 何況於凡夫 (11)

父母及妻子 兄弟并眷屬 目觀生死隔 云何不愁歎 (12)

經典導入偈

是故勸諸人 諦聽眞實法 共捨無常處 當行不死門
佛法如甘露 除熱得清涼 一心應善聽 能滅諸煩惱 (13)

第2ダンダ (無常經)

(§1) 如是我聞。一時薄伽梵在室羅伐城逝多林給孤獨園。(§2) 爾時佛告諸苾芻。有三種法。於諸世間、是不可愛、是不光澤、是不可念、是不稱意。何者爲三。謂老病死。汝諸苾芻、此老病死、於諸世間、實不可愛、實不光澤、實不可念、實不稱意。若老病死、世間無者如來應正等覺不出於世爲諸衆生說所證法及調伏事。(§3) 是故應知。此老病死、於諸世間、是不可愛、是不光澤、是不可念、是不稱意。由此三事、如來應正等覺出現於世爲諸衆生說所證法及調伏事。(§4) 爾時世尊、重說頌曰。

外事莊彩咸歸壞 內身衰變亦同然
唯有勝法不滅亡 諸有智人應善察 =11.2.1 (Uv 1.28, *Dhammapada* 151)

此老病死皆共嫌 形儀醜惡極可厭
少年容貌暫時住 不久咸悉見枯羸 =11.2.2 (Uv 1.29)

假使壽命滿百年 終歸不免無常逼
老病死苦常隨逐 恒與衆生作無利 =11.2.3 (Uv 1.30)

爾時世尊、說是經已。諸苾芻衆、天龍藥叉捷闍婆阿蘇羅等、皆大歡喜、信受奉行。

第3ダンダ

アシュヴァゴーシャ作品偈

常求諸欲境 不行於善事
云何保形命 不見死來侵 (1) =11.3.1

命根氣欲盡 支節悉分離
衆苦與死俱 此時徒歎恨 (2) =11.3.2 (*Śivagītā* 8.56)

兩目俱纒上 死刀隨業下
意想並慟惶 無能相救濟 (3) =11.3.3 (*Śivagītā* 8.57)

長喘連胸急 短氣喉中乾
死王催伺命 親屬徒相守 (4) =11.3.5 (*Śivagītā* 8.60)

- 諸識皆昏昧 行入險城中
親知咸棄捨 任彼繩牽去 (5) =11.3.4 (*Śivagītā* 8.58)
- 將至琰魔王 隨業而受報
勝因生善道 惡業墮泥犁 (6) =11.3.6 (*Śivagītā* 8.61)
- 明眼無過慧 黑闇不過癡
病不越怨家 大怖無過死 (7) =11.3.7 (*Gāthāsataka* 95, *Prajñādaṇḍa* 104)
- 有生皆必死 造罪苦切身
當勤策三業 恒修於福智 (8) =11.3.8 (*Gāthāsataka* 96, *Prajñādaṇḍa* 105)
- 眷屬皆捨去 財貨任他將
但持自善根 險道充糧食 (9) =11.3.9
- 譬如路傍樹 暫息非久停
車馬及妻兒 不久皆如是 (10) =11.3.12 (*Śivagītā* 8.67)
- 譬如群宿鳥 夜聚旦隨飛
死去別親知 乖離亦如是 (11) =11.3.13 (*Śivagītā* 8.68)

ブツダの教えを讃える定型偈

- 唯有佛菩提 是真歸仗處
依經我略説 智者善應思 (12) =11.3.16
- 天阿蘇羅藥叉等 來聽法者應至心
擁護佛法使長存 各各勤行世尊教 (13) =11.3.18
- 諸有聽徒來至此 或在地上或居空
常於人世起慈心 晝夜自身依法住 (14)
- 願諸世界常安隱 無邊福智益群生
所有罪業並消除 遠離衆苦歸圓寂 (15)
- 恒用戒香塗瑩體 常持定服以資身
菩提妙華遍莊嚴 隨所住處常安樂 (16)

上記を見ると、直ちに気づく点がある。義浄訳第1ダンダの偈については、三
婦依偈もアシュヴァゴーシャ作品偈も梵文第11三啓経の偈とは全く異なる。ひ
とつとして同じものはない⁽⁵⁶⁾。第2ダンダの阿含経典については、梵文第1節

(56) 1点、他の三啓経の関連で気づいた点を述べると、第7偈第3-4句の「未曾有一事 不被

から第4節までが義浄訳に一致し、第5節以降は義浄訳には含まれていない（本稿第5節参照）。第3ダンダの偈については、両者は同じ偈が並んでいるが全同ではなく、梵文の第10-11偈、14-15偈、17偈の5偈は義浄訳には存在しない。最後の定型偈も梵文では3偈が示されるが、義浄訳では5偈ある（本稿第6節参照）。

この漢訳から義浄が用いた梵文原典を推測することは困難である。例えば、第1ダンダ末の經典導入偈は、40種の梵文三啓経ではすべて一つの偈で置かれているが、義浄訳では2偈で置かれているように見える。これは恐らく義浄の用いた梵文原典を反映したものではなく、そこにはシュローカ偈とは異なる長文の偈が置かれていて、それを義浄が2偈で漢訳したものと思われる。実際、義浄訳第3ダンダの第9偈と第12偈は梵文では1句が14音節からなるヴァサントティラカー調の偈であり、義浄はこの偈の前に並んだシュローカ偈と同じ文字数で漢訳しているが、この漢訳から原文がシュローカ偈より遙かに長文の偈であることを推定することは難しい。

では、義浄訳と梵文第11三啓経のあまりにも大きな相違をどのように考えたらよいであろうか。確定的なことは言えないが、推測するに、第11三啓経は40種の三啓経の中では、臨終時や葬送時に読誦された、当時のインドでは最も有名な三啓経であり、時代を経る毎に様々なヴァージョンが誕生したとみなすのが最も合理的であろう。本稿で梵文テキストと和訳を示した第11三啓経も、義浄訳の『無常経』も、多くの無常経ヴァージョン中の二つにすぎないということかもしれない。

5. 無常経はどの阿含から取られたか

第2ダンダに置かれた『無常経 (*Anityatā-sūtra*)』がどの阿含から取られた經典であるのか、それを確認することは簡単ではない。現存の漢訳阿含にもパー

無常吞」と第8偈第1-2句の「上至非想處 下至轉輪王」を併せて1偈とすれば、第14三啓経の漢訳（『解憂経 (*Śokavinodana*)』の偈と同文あるいは類似偈に見える。「如是欲色界 及彼非非想 未有於一物 不被無常吞」（大正 804, 17卷, 749c18-19）。ただし、不思議なことに、その梵文は漢訳と同じではない。paralokaṃ yadā kaścīd gacchantam nānugacchati |

nirvīṣeṣo bhavet tatra dveṣyo vā yadi vā priyaḥ || 14.1.23 || 来世に向かう人に誰も付き従うことはない。もし好きな人であっても、嫌いな人であっても、そこでは区別されないであろう。

り語のニカーヤにも、さらに種々の梵文阿含の断簡類にも、その全体がこれと一致する経典は認められないからである⁽⁵⁷⁾。本稿では第2ダンダの『無常経』を六つのパラグラフに分けて提示したが、義浄訳の『無常経』は第5節と第6節を欠いている。ただ、それぞれのパラグラフの文章に一致する阿含経典は存在する。

まず、漢訳『雑阿含』の1240番（大正2巻, 339a-340a）および『別訳雑阿含』の67番（大正2巻, 397a-b）は本経の第2節から第4節に対応する経典であるが、1240番と別訳67番では、第2節と第3節の文章はプラセーナジット王の思索の内容であり、場面設定が本経とは全く異なる⁽⁵⁸⁾。また『雑阿含』760番（大正2巻, 199c-200a）も第2節から第3節に対応する経典であるが、こちらは文章はブツダの説いたものとなっている⁽⁵⁹⁾。ただし、1240番に含まれていた第4節の偈を欠く散文だけの経典である⁽⁶⁰⁾。

では、義浄訳の『無常経』には含まれない第5節と第6節に対応する阿含は存在するのか。そこで注目すべきは『雑阿含』1240番とも関係のある漢訳『増一阿含』第18巻第6経（大正2巻, 637a-638a）である。これは大正蔵で1頁ほどの経典であるが、プラセーナジット王との対話を終えた後で、場面が変わり、ブツダは比丘たちに四つの事項を説く。それは第5節と同じ内容を持つが、提示順は異なる。第5節の和訳中に付した項目番号に対応するように番号を付して提示すると以下の通りである（637c9-18）。

爾時世尊告諸比丘。有四法在世間人所愛敬。云何爲四。(2a) 少壯之年世間人民之所愛敬。(1a) 無有病痛人所愛敬。(3a) 壽命人所愛敬。(4a) 恩愛集聚人所愛敬。是謂比丘有此四法世間人民之所愛敬。復次比丘復有四法。世間

(57) 『三啓集』に対する第1号論文の中で松田は『無常経』が『雑阿含』1240番であると書いたが（松田和信2019: 9, n. 3）正確ではなかった。本稿で以下述べるように訂正する。

(58) *SN 3.1.3 Rājā-Jarāmaraṇa* (PTS ed., vol. 1: 71) が『雑阿含』1240番の対応パーリ経典とされるが、末尾にある一偈 (Uv 1.28) が一致するだけで、散文部分は大きく異なる。

(59) 『雑阿含』346番の冒頭部 (95c18-22) も原文はこれと同文であろう。

(60) 第4節に含まれる Uv 1.28 に対して、Prajñāvarman の *Udānavargavivarāṇa*, Balk 1984, I: 119.20-120.2には、『雑阿含』1240番および『別訳雑阿含』67番と同じ経典が引用され、Uv 1.28 がプラセーナジット王に関して説かれた偈であると注釈されている。

人民所不愛敬。云何爲四。比丘當知。(2b) 少壯之年若時老病世人所不喜。(1b) 若無病者後便得病世人所不喜。(3b) 若有得壽命後便命終世人所不喜。(4b) 恩愛得集後復別離是世人所不喜。是謂比丘有此四法與世迴轉。

各事項の提示順は第11三啓経の第2ダンダ第5節とは異なるが、全体としてはこれは第5節と同じである。ただし、これに続く第6節の偈はこの經典には見られない。また、この項のパラレルは漢訳『雑阿含』にも、パーリ・ニカーヤにも見出せない。注意すべきは、他の三啓経から判断して、三啓経に用いられた阿含經典はすべて〔根本〕説一切有部教団の伝承する阿含の可能性が高いということである⁽⁶¹⁾。漢訳『増一阿含』は有部の阿含ではない。有部の『増一阿含』は一部が梵文写本で残っているだけで、あとは失われている。では、部分的にパラレルが認められるこれらの經典類から見て、第2ダンダの無常経には何が言えるのか。確かに、現存資料にはその全体に対応する經典は存在しない。可能性は失われた〔根本〕説一切有部教団の『増一阿含』しか残されていない。現存する『増一阿含』第18巻第6経は、有部の『増一阿含』とは相当の開きのある別教団ヴァージョンであるように思われる。

ところで、『無常経 (*Anityatā-sūtra*)』という名前の經典で従来知られていたのは、漢訳で言うと法天訳の『諸行有為経』(大正758)であり、これはチベット語訳の P976 (D310) と同じ經典である。その内容は、王族、婆羅門、天、阿羅漢、あるいは如来であっても最後は死に終わると説く短編經典である。さらにこの『無常経』には梵文原典も存在するが⁽⁶²⁾、第11三啓経、つまり義浄訳の『無常経』とは無関係であり、その対応經典が漢訳阿含やパーリ聖典の中に存在するわけでもない。

一方、チベット語訳大蔵経のカングェルにはもうひとつの『無常経』が収められている (P975, D309)。こちらの『無常経』は第11三啓経と関係がある。

(61) この点については松田和信2021: 65-68参照。

(62) 以前は山田一止 (Isshi Yamada) と木村高尉の校訂梵文で知られ、現在は Bhikṣuṇī Vinitā (Vinitā Tseng) が校訂本を出版しているのはこの『無常経』である。Vinitā 2010: 169-206.

この経典は病、老、死、不幸の四法を主題とする散文にひとつの偈が付属する形式の短経である。実は、これは義浄訳には含まれない第11『三啓経』第2ダ
ンダの第5節と第6節を単独経典に仕立てたものに他ならない。末尾の偈も一致
する。ただし、事項の数はひとつ増えて全部で五つの項目となっている。第
5節にある *iṣṭa, kānta, priya, manaāpa* の4語がチベット訳では *sdug pa, dben pa,*
phangs pa, yid du 'ong ba, mngon par dga' bar bya ba の5語に拡大し、さらに死と
不幸の順もチベット訳では梵文と逆になっている。このチベット訳は恐らく第
11三啓経とは別系統の有部阿含を原本とする経典である可能性があるように思
える⁽⁶³⁾。

6. ブツダの教えを讃える定型偈について

40種の三啓経はいずれも第3ダ
ンダ末にブツダの教えを讃える定型偈を置
いている。定型偈には数種が認められるが、義浄訳『無常経』では5種の定型偈
(第3ダ
ンダ第12-第16偈) が置かれている。一方、梵文第11三啓経では定型偈
は3種 (11.3.16-18) である。このうち、義浄訳第12偈は梵文11.3.16と同じであ
り、第13偈は11.3.18と同じである。省略形で示される梵文のもう一つの定型
偈 (11.3.17) は義浄訳に欠く。義浄訳では、この2偈に加えて、さらに3偈 (第
14-16偈) が置かれているので計5偈である。義浄訳の3偈は梵文第11三啓経に
は含まれないが、他の三啓経から梵文テキストは確認できる。以下に示そう。

義浄訳第3ダ ンダ第14偈

諸有聽徒來至此 或在地上或居空
常於人世起慈心 晝夜自身依法住
yāniha bhūtāni samāgatāni
sthitāni bhūmāv athavāntarikṣe |
kurvantu maitrīm satataṃ prajāsu
divā ca rātrau ca carantu dharmam || (Upa)

地上に住む者であれ、空中に住む者であれ、ここに集まった有情たちは常に

(63) デルゲ版の東北目録、北京版の大谷勘同目録、菅原泰典2000: 337は P975, D309 の漢訳
平行情として義浄訳『無常経』(大正801) を挙げるが、誤りである。

生類に慈しみをなせ。昼も夜も〔ブツダの〕法（ダルマ）を行ずべし⁽⁶⁴⁾。

義浄訳第3ダンダ第15偈

願諸世界常安隱 無邊福智益群生
所有罪業並消除 遠離衆苦歸圓寂
sarve sattvāḥ sarve prāṇāḥ sarve bhūtāś ca kevalāḥ |
sarve vai sukhinaḥ santu sarve santu nirāmayāḥ ||
sarve bhadraṇi paśyantu mā kaścit pāpam āgamat ||

すべての有情（sattva）たち、すべての命ある者（prāṇa）たち、すべての純一なる（kevala）生類（bhūta）たち、すべての者たちが安楽（sukhin）であらんことを。すべての者たちが健康（nirāmaya）であらんことを。すべての者たちが善（bhadra）を得んことを。決して誰も悪（pāpa）に近づかんことを⁽⁶⁵⁾。

義浄訳第3ダンダ第16偈

恒用戒香塗瑩體 常持定服以資身
菩提妙華遍莊嚴 隨所住處常安樂
śīlacandanalīptāṅgā dhyānaprāvaraṇāvṛtā |
bodhyaṅgakusumākīrṇā viharadhvaṃ yathāsukham ||

戒（śīla）という白檀香（candana）を肢体に塗り、禪定（dhyāna）という外套（pravaraṇa）を纏い、菩提分（bodhyaṅga）という花（kusuma）を散らして、意のままに（yathāsukham）あなた方は住すべし。

このような義浄訳と梵文第11三啓経との定型偈数の違いも、三啓経としての『無常経』が多くのヴァージョンで伝承されていたことを物語っているのであろう。ここで、さらに注目すべきことがある。上記義浄訳の三つの定型偈（第14-16偈）とそれに先立つ第13偈を加えた四つの定型偈（第13-16偈）は、同じ義浄が漢訳した根本有部律の『雑事（*Kṣudraka-vastu*）』にこの順番で連続して現れる（大

(64) この定型偈については松田和信、出本充代、上野牧生、田中裕成、吹田隆徳 2022: 68, n.64 参照。

(65) この定型偈は『マハースートラ』に分類される *Vaiśāṅgapraveśa-sūtra* に含まれる。Skilling 1997: 595-6 (*Svasti gāthā*), Skilling 1994: 602 (10A.6.18)。これ以外にも多くのパラレルが存在する (*ibid.*, 603, 615)。

正24巻, 222a10-17)。なお、チベット語訳の『雑事』には、四つの偈のうちの第二の偈（第14偈）のみ含まれる⁽⁶⁶⁾。『雑事』でこれら四つの偈は、仏徳の讚歎と三啓経だけは節をつけて詠唱することをブツダが許可するという興味深い一段に置かれている。

さらに付記すると、不空が漢訳した三巻本の『孔雀明王経 (*Mahāmāyūrī*)』の各巻末尾にも四つの偈は同じ順番で付加され⁽⁶⁷⁾、同経の義浄訳も同様であるが⁽⁶⁸⁾、梵文『孔雀明王経』には含まれない（田久保周誉1972参照）。また、不空訳の他の密教経典末尾にも付加されている⁽⁶⁹⁾。義浄がインドを訪ねた時代では、これら四つの偈は、三啓経を離れて、ひとつのセットとして伝承されていたのかもしれない。これら定型偈の作者が誰であったのか、無論、義浄の認識では三啓経の全体がアシュヴァゴーシャの手になるものであるから、これらの偈もアシュヴァゴーシャ作ということであろうが、その可能性は高くはないと思われる。ただ、律という仏教聖典や密教経典にも組み込まれているのであるから、何らかの権威を持った詠唱用の偈として当時の僧侶たちの間で知られていたことも確かであろう。

7. 最後にくマールラータの喩蔓論

当初、第3ダンダ第11偈（11.3.11）の読解は我々には極めて困難であった。この箇所の写真は不鮮明で、とても読めた代物ではなかった。この偈は義浄訳にも含まれず、部分的に読むことができた箇所からも、文章の構造も何が書かれているかもほとんど分からなかった。最終的に、それが本稿で示したように奇麗に読解できたことには、奇跡のような発見があった。偶然にも、第2句の *padam api hi nānurvrajati sah* の文字列がリュエデルスの出版したクマールラータの著した『喩蔓論 (*Kalpanāmaṇḍitikā Drṣṭāntapaṅkti*)』の第2写本の梵文断

(66) D No. 0006, Tha 43a1-2.

(67) 大正982, 19巻, 422b, 432b, 439b。

(68) 大正985, 19巻, 464a, 471c, 476a。なお、大正蔵の471cでは散文で印刷されているが、偈である。

(69) 例えば、大正989『大雲輪請雨經』第19巻, 492c, 大正1153『普遍光明清淨熾盛如意寶印心無能勝大明王大隨求陀羅尼經』第20巻, 622bなど。

簡 (SHT 638s) に含まれることが分かったのである⁽⁷⁰⁾。残念ながら、梵文断簡ではこの偈の文字はこれだけで、残りは失われている。ただ幸いにも、ローマ字転写の中で、リュエデルスはこの部分が『喩蔓論』の第4話の一部であることを示している。『喩蔓論』を漢訳した『大莊嚴論経』の対応箇所を見ると、この偈は次のような一連の偈の中のひとつであることが分かる (大正4巻, 262c13-29)。これによってこの偈を正しく解読することが可能となった。

往古諸王等	積寶求名稱	聚會諸賓客	出寶自矜高
捨位命終時	捐寶而獨往	唯有善惡業	隨身不捨離
譬如蜂作蜜	他得自不獲	財寶亦如是	資他無隨己
往昔諸國王	爲寶之所誑	儲積已待他	無一隨己者
吾今當自爲	必使寶隨己	唯佛福田中	造作諸功德
<u>隨己至後世</u>	<u>善報不朽滅</u>	<u>臨當命終時</u>	<u>一切皆捨離</u>
<u>舉宮室親愛</u>	<u>大臣諸猛將</u>	<u>悲戀送亡者</u>	<u>至塚則還家</u>
<u>象馬寶輦輿</u>	<u>珍玩及庫藏</u>	<u>人民諸城郭</u>	<u>園苑快樂處</u>
<u>飄然獨捨逝</u>	<u>都無隨從者</u>		

下線と太字で示した部分が第11偈 (11.3.11) の漢訳である。梵文と比較すると言葉が相当足されているが、元の梵文では1句が17音節からなるシカリニー (Śikharinī) 調の長文偈が、第4話では3偈半を費やして漢訳されている。我々の見るところ、これと同じ偈は、使用された語と句の順番は異なるが『喩蔓論』の第15話にも現れる。以下の通りである (大正4巻, 273b5-23)。なお、第15話のこの偈に対応する梵文断簡は存在しない。

莊嚴面目者	臨水見勝好	好醜隨其面	影悉現水中
莊嚴則影好	垢穢則影醜	今身如面貌	後受形如影
莊嚴形戒慧	後得可愛果	若作惡行者	後受報甚苦
信心以財物	供養父母師	沙門婆羅門	貧窮困厄者

(70) Lüders 1926: 201.

即是後有水 於中見面像 施戒慧業影 亦復彼中現
 王有衆營從 宮人諸婬女 臣佐及吏民 音樂等倡妓
如其命終時 悲戀送塚間 到已便還家 無一隨從者
後宮侍直等 庫藏衆珍寶 象馬寶輦輿 一切娛樂具
國邑諸人民 苑園遊戲處 悉捨而獨逝 亦無隨去者
唯有善惡業 隨逐終不放

第15話でも、同じ偈が言葉を足して3偈半を費やして漢訳されているが、第4話と第15話は、いずれも国王に対して、王であっても、兵士や大臣や後宮の女性たちは来世につき従うことはなく、死後につき従うのは自分が積み重ねた業(karman)だけであることを説いている。第3ダンダの第11偈には主語としての「王」の語は現れない。これは第11偈が単独の偈ではなく、ストーリー展開上の一連の偈のひとつだからである。つまり、仮に第11三啓経の写本写真が万全で、それだけで文章が正確に読めたとしても、ストーリー上の偈であることが分からない限り、正確な理解は困難であったと思う。

では、この第3ダンダの第11偈(11.3.11)は元は『唵蔓論』の著者であるクマララータの偈であって、それを第11三啓経の編者が借用したのであろうか。無論、その可能性は高いかもしれないが、一方で、上記に提示した一連の偈自体が元はアシュヴァゴーシャ作品、例えば失われた『莊嚴経論(Sūtrālamkāra)』の偈で、それをクマララータが『唵蔓論』に借用した可能性も排除できない。もしそうであるなら、『唵蔓論』の偈には、他にもアシュヴァゴーシャ作品偈が含まれている可能性があることになる⁽⁷¹⁾。いずれにしても、第11三啓経に限っても、本稿の各偈の箇所て注記したように、『マハーヴァストゥ』やヒンドゥー教の聖典などにも同じ偈が認められ、仏教・非仏教を問わず、アシュヴァゴーシャ作品偈とされる多くの偈が古代インドで人口に膾炙していたその一端を明らかにしたことはなろう。

(71) 現時点では未発表であるが、『唵蔓論』の中に『三啓集』に含まれる偈の同一偈がさらに2偈含まれていることがハルトマンによって発見されている。

〔略号と参考文献〕

- 大谷勘同目録: 大谷大学図書館 1932 『西藏大藏經甘殊爾勘同目録』 2. 京都: 大谷大學圖書館.
東北目録: 宇井伯寿ほか 1934 『西藏大藏經總目録』 仙台: 東北帝國大學法文學部.
- D:** デルゲ版チベット大藏經.
P: 北京版チベット大藏經.
- BHSD: Edgerton, Franklin. 1953.** *Buddhist Hybrid Sanskrit Grammar and Dictionary*. vol. 2: Dictionary. New Haven: Yale University Press.
- BHSR: Edgerton, Franklin. 1953.** *Buddhist Hybrid Sanskrit Reader*. New Haven: Yale University Press.
- Uv: Bernhard, Franz. 1965.** *Udānavarga (Sanskrittexte aus den Turfanfunden X)*. Band I. Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht.
-
- Balk, Michael. 1984.** *Prajñāvarman's Udānavargavivarāṇa: Transliteration of Its Tibetan Version (based on the xylographs Chone/Derge and Peking)*. vol. 1. Bonn: Indica et Tibetica Verlag.
- **2011.** *Untersuchungen zum Udānavarga*. Marburg: Indica et Tibetica Verlag. (Rep. PhD thesis 1988).
- Campbell, W. L. 1919.** *She-Rab Dong-Bu or Prajñya Danda*. Calcutta: Calcutta University.
- Hahn, Michael. 2009.** "The Tibetan *Shes rab sdong bu* and its Tibetan Sources (I)." 『南アジア古典学』 4: 1-78.
- **2010.** "The Tibetan *Shes rab sdong bu* and its Tibetan Sources (II)." 『南アジア古典学』 5: 1-50.
- **2012.** "Vararuci's *Gāthāśataka (Tshigs su bcad pa brgya pa)* and its Indian Sources." 『南アジア古典学』 7: 367-458.
- Johnston, E. H. 1928.** *The Saundarananda of Aśvaghōṣa*. London: Oxford University Press.
- **1935.** *The Buddhacarita: Or, Acts of the Buddha, Part I - Sanskrit Text*. Calcutta: Baptist Mission Press.
- Lüders, Heinrich. 1926.** *Bruchstücke der Kalpanāmaṇḍitikā des Kumāralāta*. Leipzig: Deutsche Morgenländische Gesellschaft in Kommission bei F. A. Brockhaus.
- Marciniak, Katarzyna. 2020.** *The Mahāvastu; A New edition*, Vol. II. Tokyo: Soka University.
- Śivagītā, 1929.** Bombay: Nirnaya Sagar Press.
- Skilling, Peter. 1994.** *Mahāsūtras: Great Discourses of the Buddha*. Volume I, Texts. Oxford: The Pali Text Society.
- **1997.** *Ibid.*, Volume II.
- Senart, É. 1890.** *Le Mahāvastu*. Tome II. Paris.
- Vinītā, Bhikṣuṇī. 2010.** *A unique collection of twenty Sūtras in a Sanskrit manuscript from the Potala*. Sanskrit Texts from the Tibetan Autonomous Region, 7.1-2. 2 vols. Beijing and Vienna: China Tibetology Publishing House and Austrian Academy of Sciences.
- 上野牧生 2020 「第29三啓經（八難經）の梵文テキストと和訳」 『仏教学セミナー』 111: (21)-(46).
- 岡田行弘 1995 「ヴァラルチ『百頌』（*Śatagāthā*）和訳」 『神戸女子短期大学学術紀要』 6: 1-14.
- 菅原泰典 2000 『經集部小經解題』 仙台: 私家版.
- 田久保周誉 1972 『梵文孔雀明王經』 東京: 山喜房佛書林.
- 釋舎幸紀 1986 「無常經の思想史的意義 - 特に「無量光仏礼讚文」への展開を求めて -」 『高田短期大学紀要』 4: 14-49.
- 平岡聡 2010 『ブッダの大いなる物語 梵文『マハーヴァストゥ』全訳』 上巻. 東京: 大蔵出版.

- 松田和信 2019 「三啓集 (*Tridandamāla*) における勝義空経とブツダチャリタ」『印度学仏教学研究』 68-1: 1-11.
- 2021 「不浄観を説く中阿含139経—三啓集から回収された梵文テキストと和訳—」『佛教大学仏教学会紀要』 26: 63-81.
- 2022 「アシュヴァゴーシャ・アンソロジー—鳩摩羅什訳文献に見られる馬鳴の詩作品—」『佛教大学仏教学部論集』 106: 19-36.
- 2023 「アシュヴァゴーシャから鳩摩羅什へ—精進と懈怠の大智度論引用偈に基づいて—」『仏教学セミナー』 118: (1) - (22).
- 2024 「アシュヴァゴーシャのアートマン批判—第8三啓経「勝義空経」の梵文テキストと和訳—」『佛教大学仏教学部論集』 108: 1-21.
- 松田和信, 出本充代, 上野牧生, 田中裕成, 吹田隆徳 2022 「毒蛇の喩え—第26三啓経の梵文テキストと和訳—」『佛教大学仏教学会紀要』 27: 47-78.
- 2023 「ごみの山に終わる華鬘の喩え—第5三啓経の梵文テキストと和訳—」『佛教大学仏教学会紀要』 28: 55-80.
- 宮林昭彦・加藤栄司 2004 『現代語訳 南海寄帰内法伝』 京都: 法蔵館.